結婚における役割行動の研究

嶋田津矢子

1 役割葛藤の諸局面

性的満足，経済的保障，あるいは成功への期待など人は，結婚に対してさまざまの期待を寄せる。それらの諸機能をめぐって，夫と妻とがそれぞれに果す役割関係の調整と不調整とが，結婚の成否を決定する重大な分岐点となる。

恋愛，また婚約の時期において，当事者は互いに相互の所属感情とプライバシィの完全保障の場として，結婚に期待を寄せるであろう。結婚における所属感情は，単一性と持続性とを本質とする点で，一般の契約とは性質を異にしている。結婚における所属感情は，他者を交えないこの純粋に2人だけの世界で，互いに相手の存在を不可欠のものと感じ合うことによって，相互の人間的価値の重要性を認め合う。互いに他に認められたいという欲望をもつ人間の本性から，2人はここに自我の深い満足を見出すのである。この "egosatisfaction" の欲求こそ，結婚を成立せしめる基本的要因であって，「結婚する人々は，独身を続ける人々の場合より以上に，自我欠損感情 (feelings of ego deficiency) を表示している。……結婚に最も強く惹きつけられる人というのは，未成熟または不十分な適応しかできない人であると云えるかも知れない。」[1] と云ったフロイド・M・マーティンソンの表現は，聊か誇張に過ぎるかもしれないけれども，産業社会の都市化現象の渦巻のなかに自己を埋没させられるこの時代に，人々は見失われようとする自我を固く維持しようとするならば，結婚は自我満足の欲求にとって大きな救いを意味するものとなるであろう。

〔註1〕 Floyd M. Martinson, "Ego Deficiency as a Factor in Marriage," *American Sociological Review*, April, 1955, pp. 163–164.

結婚当事者の相互関係の中心をなすものは，それぞれのパースナリティの取り結ぶ関係である。恋愛において，人は相互にその対象のパースナリティを理解し得ているように思いこみやすいけれども，その過程には，客観的な相手のパースナリティの実体そのものの認識よりも，自己の欲求や願望を相手の所作を媒介として再吟味しようとする「ひとりごと」的傾向の方が一層強く働いているので，現実の結婚関係の強烈さや複雑さに直面してはじめて，2人は相互関係のなかに思いがけぬそれぞれのパースナリティの現実の姿を発見することになるのである。

恋愛や婚約の期間には，相寄る魂の相似性の側面に関心を集中し，双方の希望的観測に陶酔の場を求めて，相違する部分が結婚後のパースナリティ相互作用にいかなる影響を与えるかを問おうとはしない。ランディス夫妻が指摘しているように「結婚前には，愛し合う人々は物の見方の相違性よりも，むしろ同似性を強調する傾向をもつ。」[2] しかるにひとたび結婚すると，結婚前には見逃がされていた双方のパースナリティの相違点が，生活の隅々に頭をもたげてくるのである。相互のパースナリティの認識とそれへの適応が，結婚前の交際の極めて局限された状況での主観的希望的な観察の段階を離れて，いまや日常生活を共に分け合うなかで，社会的拘束をぬきにした赤裸々な姿を露出することになると，予期しなかったパースナリティの諸側面が表面に現われてきて，ショックや抑圧を与えることになるのである。

〔註2〕 Judson T. Landis and Mary G. Landis, *Building a Successful Marriage*, New York, 1953, p. 253.

性的なはけ口のみを求めて結婚するという人は稀れではあるが，結婚の性的側面が，ウイラード・ウォーラーのいわゆる「調和的要因」(a har-

monizing factor)」[3] として，結婚における人間関係の緊密度にもたらす影響は，軽視することを許さぬものをもっている。

〔註3〕 Willard Waller, *The Family, A Dynamic Interpretation*, New York, 1951, p. 278.

ハヴェロック・エリスを俟つまでもなく，結婚はエロティックな関係以上のものであるが性的満足を欠く場合には離婚に導かれる危険の多いことは否定し得ない。性の領域に於ては，一方の望むところはまた相手がそれによって満足する行動でなければならない。その相互性の高さこそ調和をうむ根源である。しかるにロバート・R・ベル教授も述べているように，「多くの若者たちは性的関係を，相手に対する意思表示と愛の手段としてよりも，殆んど例外なく個別的満足の手段と見なしながら結婚するようである。……若い女性たちは最初は性的関係をもって，結婚後に無限に継続する一連のできごととは恐らく考えていない。むしろ彼女は性的経験を愛の表示手段と考えているであろう。」[4] 男子と女子との性関係に対するこのような視角の相違が結婚における相互の期待を裏切る原因の一つとなっている。

〔註4〕 Robert R. Bell, *Marriage and Family Interaction*, 1963, pp. 252-3.

純情に身を捧げる多くの女性は，その愛情ゆえに「手なべさげても」というように経済的考慮を事もなげに超越すると考えられているが，それにもかかわらず，婦人にとって結婚は両親からの経済的独立の重要手段となるのであるから，夫の経済的能力は決して無関心に済ませうることではない。殊に婦人の就職が普遍化し，自活の能力と機会が約束されるようになってきた現代社会では，婦人が就職を断念し，敢えて結婚を決意するときは，自らの経済的保障を夫の手にゆだねるわけであるから，そのような場合，夫はただに生計確立者としての伝統的役割のみならず，さらに妻の職業上の未来に対する期待を放棄したことに対して，その賢明さを実証するに足るだけの此世的な成功を余分に義務付けられる結果となっている。男子に課せられたこの重荷が，結婚における男女の対立関係をうむ源泉になることも稀れではない。

社会経済的地位の高低は，生活設計における計画性えの意欲を左右する。ジェームス・M・モルガンたちの研究によれば，所得と教養が低ければ低いほど将来の計画を志向することが少ない。[5] 「計画」とは特定の行為系列を固守し，生起する特殊事情に支配されることなく遂行される戦略を意味する。自己の将来の諸事情えの安定した統制力を確立しえない低い社会経済的階層では，長期の行為系列を定めるような社会過程に乗りだすことを好まない。例えば低い所得階層では，子供を大学に進ませることを躊躇し，教育費貯蓄の計画を立てようとはしないし，それが例え俄か成金にのし上ってきたとしても長期の教育計画をたてるよりは，当面の飲酒や住宅建築に関心を集中することになるであろう。そのような夫と連添うとき，より高い社会経済的階層に育って，何事においても将来への整然たる計画性のなかでの生活を訓練されてきた妻は，人生の無計画的態度に耐え難いだらしなさを感じ，この生活態度の不調和を致命的なものとさえ感ずることになるであろう。

〔註5〕 James N. Morgan and Others; *Income and Welfare in the United States*, New York, 1962.

結婚における相互の期待関係に強い影響を与えるいま一つの要素は，文化的背景に根差すものである。それは夫婦相互に異質的なものへの期待と願望を抱かしめる。結婚相手の選択に当っても，性的行動を越えた文化的感覚が，愛情表現の形式をうみだし，その文化的同質性の欠如は双方の欲求挫折や誤解に導くが，この文化的要素は，双方の属する社会階層の特殊性によって制約されている。

結婚における文化的要素をめぐる葛藤は，(1)文化的葛藤，(2)階層的相違，(3)文化的変化の3つの角度から分析することができよう。

異る文化的集団に属する人々の結婚，例えば都市と農村に居住する者，異る宗教やイデオロギーをもつ者のあいだの結婚が，絶えざる意志阻隔の根源をはらんでいることは，詳言するまでもないことであろう。異る階層間の結婚が行われた場合はもとよりのこと，例えば両親，親戚の配慮によりその育った同一階層のなかでの見合結婚が行わ

れた場合も，夫が既に階層移行の過程を歩み来って，異る生活観に馴じみつつあるために，同郷同階層の因縁に結ばれながら，次第に異邦人の心境を味うということもあろう。生活サイクルのなかで，職業上の栄達による階層の移行が，従来の道徳的基準や忠誠心からの社会解放のみをもたらし，それに対応する新しい基準や忠誠心を身につけさせていない場合には，道義性からの逸脱が避けられぬものとなり，夫婦のあいだに深い溝を掘ることを見落してはならない。

2　役割概念と役割期待の種々相

以上に瞥見した諸局面が，夫婦それぞれの役割を中心に，種々の葛藤をひきおこす舞台となるのである。結婚女性の役割を，カーク・パトリックは次の3種に分類しているが，[6] それはそれぞれ妻としての特権と共に義務を伴っている。

(1)　「妻および母としての役割」—それは伝統的に承認されてきた役割であって，家政担当者としての権威と，愛児を出産し養育することに対しての夫と子供との感謝とに基き，生活を維持し尊敬を受ける特典と，それに価するだけの家政・育児，また夫のもたらす社会的・経済的地位や，限られた範囲の興味と活動を受容する義務とを包含する。

〔註6〕 Clifford Kirkpatrick, *The Measurement of Ethical Inconsistency in Marriage*, the International Journal of Ethics, July 1936, pp. 444–60.

(2)　「友愛 (companion) 的役割」——特に上層および中層家庭で強調されてきたもので，夫と愉悦を共にわかち，ロマンティクな情緒的応答を交わし，敬愛の対象となり，相応した衣食やレクリエーションのための資金を提供され，社会的教育的活動への余暇を享受する特典をもつと同時に，美しさを保ち，夫にエゴとリビドーの満足をもたらし，夫に有利な社交の道をひらき，知性の明敏を心掛け，家庭生活を退屈さに陥ることから免れさせる義務を担う。

(3)　「協力者 (partner) 的役割」——近代化の進むにつれてうまれた文化的状況の所産であって，経済的独立，家計における平等の権威，本質的平等の地位の承認，主婦の一方的サービスの否定，社会的・道徳的自由に関する平等性を要求する特典を有すると共に，家族の法律的責任を共通に分担し，一面的に男子の保護に依存することなく，職業上の成功によって家族の地位を維持するために，平等の責任を遂行する義務を負わされる。

これらの諸役割は，互いに重複し合い，その複雑なからみ合いは，主婦の結婚役割選択を誤らしめ，役割の多様性の結果として，種々の形の役割不調整をひきおこしている。

役割多様性による選択の困難さに当惑する主婦が，躊躇・逡巡することによって，欲求挫折の場合と同じように，パースナリティの緊張や葛藤をよびおこすこともあろう。或いはまた役割の多様性に直面して，その婦人が一つの役割を望みながら，義務感または習慣のため，他の役割を遂行することによって，欲求挫折を経験する場合もあるであろう。さらにまた，主婦の為すべき役割について，夫と妻のあいだに異る理解の存することから生じるパースナリティ葛藤もあるであろう。妻および母としての役割に第一義的重要性を認める主婦が，協力者的役割を最重視する夫の期待に添い得ぬこともあり得るのである。最後にまた，主婦の特典と義務との不釣合な態度をあえて求めるような，倫理的矛盾に陥る場合も存しうる。妻に対する特典は，夫の側でのある種の義務を伴うのであるから，妻の側でそれに対応する義務を受け容れることなく，いくつもの役割の特典のみを要求することになると，結婚関係の不公平は不可避となるであろう。逆にまた主婦の側で幾つもの義務を背負わされながら，それに対応する特典を拒否されることになると，夫にくらべて不満足な立場におかれざるを得ないであろう。

世間には，自らは子を生まずして母としての義務を期待し，自らは所得なくして感謝を受けようと望み，助力者というよりも寄生虫的存在でありながら安泰を求め，無精者で無感覚でありながら魅力的でありたいと願い，貢献するところなくして尚，家産の半ばは自分のものと平気で主張する主婦もある。しかし逆に子供を生み，煩雑な家事

を一身に背負い，夫と同じく長時間の職業に携わりながら，個人的魅力を失わず，知的能力を発揮しているにも拘らず，感謝も保障も愛情も評価も受けていない婦人たちも存在するのである。夫と妻とが結婚役割における特典と義務とについて，違った解釈を行っていることがある。彼らは互いに多くの特典を期待しつつ，役割における義務遂行には，労するところ少くして収穫の多からんことを求めるというような，倫理的矛盾を犯しがちである。

結婚における役割の選択は，いままで独身生活に適応してきた個人が，2人暮しの新生活に調整しなければならないことから，パースナリティの或る程度の欲求挫折を伴うのが常である。この場合男子専権の傾向の根強く残存する日本社会の習俗やモーレスにあっては，女性の経験する欲求挫折の方がはるかに深刻である。抑圧の連続の中での表面的な従順さや，しとやかさの蔭に，爆発的な欲求不満を蓄積していることがある。激変する社会生活のうちにあって，家庭生活も急速な変化を経験しつつあるが，マス・コミや会合に啓発されて，平均化現象が浸透し，階層的相違を越えて，刻々に結婚役割についての新しい見方が或る程度普遍的なものとなり，それが従来から続けられてきた自己の現実的夫婦関係をゆり動かし，多くの主婦たちが不適応をむしろ誇張された形で自覚せしめられることさえおこっている。

レオナード・S・コトレルは，結婚における協力関係が，多様な役割関係のもとで遂行されることを指摘した。例えば主婦はその夫に対して，時と所次第で子供を甘えさせる母親の如く，また嫌われ者の妹のごとく振舞うし，夫は妻の尊敬する父親のごとき物腰をもって臨むかと思えば，意地悪の弟の如く立ち向うといった調子で，家族関係の状況に応じて感情と憎悪の入れ混った態度をとるであろう。コトレルは夫及び妻の個人的役割と結婚調整との相互関係について，彼の分析を次の三つの命題にまとめている。(7)

1)　結婚調整は結婚当事者が自分たちのそれ以前の家族集団のなかで獲得したある種の関係体系または状況を再演しようと試みる過程とみなすことができよう。

2)　結婚当事者たちが結婚に持ちこんでくる諸役割の種類によって，彼らの結婚関係と彼らの成し遂げる調整の程度とが決定されるであろう。

3)　不調整結婚は，結婚当事者たちが結婚に持ちこんでくる諸役割によって要求される関係体系 (a system of relationships) を，結婚状況が提供することに失敗した結果であると見なし得よう。

もし母親が権威的役割を演じ，その夫や子供たちを原則的に支配した家庭に育ったとすれば，その息子は己が妻がそれと同様の支配的態度をとることを期待するかもしれない。しかるに妻自身は，従属的で依存的な役割を演ずるようにしか訓練しない家族経験の持主であったとしたら，一体どういうことになるであろうか。そのような夫と妻との間では，互いに自己の期待するタイプに相手をはめ込もうとする葛藤関係が生じ，暫らくは情緒的欲求を双方の側で抑制し，もし何れの側でか耐え難い抑圧と感じられるまでは，一時的にかまたは永久的にか，このような状況を隠忍することになるのである。

〔註7〕 Leonard S. Cottrell, "*Roles in Marital Adjustment*," Publications of American Sociological Society Vol. 27 (1933), pp. 108–109.

3　役割概念と役割遂行との矛盾関係

以上の如くに見てくると，結婚当事者は互いに相似の役割概念と役割期待をもつ相手を選定することが，とりわけ重要であるということが理解されるであろう。ロバート・O・ブラット教授の記しているように「結婚は，それを崩れないように維持するためには，均衡状態のうちに保たれなければならぬ一つの小型の社会体系 (a miniature social system) である。均衡状態は，一方の側の役割演出が他の側の役割期待に対応することを求めている。夫が自分の妻に対してもつ一切の期待は，夫が彼女からあるサービスを要求する権利に他ならない。これは，彼女についての彼の抱く期待を充足する義務を妻の側に課することになる。このようにして，権利と義務とは互いに補足し合う関係に在る。」(8)

〔註8〕 Robert. O. Blood, *Marriage*, New York, 1962, p. 189.

夫婦の役割行動 (The role behavior) が相互補完的であり，その相互補完性が高度の均衡を保っている限りは，役割体係は自動的に機能し，特別の意識的努力を必要とはしないけれども，結婚配偶者として不適合性を感ずるに至るのは，双方のあいだに役割概念と役割遂行とのギャップを感ずるからである。教養によって自己に課する役割の基準が高ければ高いほど，結婚の伴侶としてこの役割への不適合性を感ずる程度も強烈である。

役割行動は，当事者のもつ観念的要素によって左右されるだけではなく，欲求 (needs) や欲動 (drives) のごときパースナリティ要因や，また失業というような外部的境遇からも影響をうける。各個人は，社会的に受容しうる役割を通して，自己の欲求を満足しようとするが，もしその欲求が既定の役割に矛盾するようなことがあれば，役割行動の類型は変更を蒙るか，徹回されざるを得ないことになるであろう。また疾病や不景気等によって失業する場合には，自己の選びとった役割を遂行する機会を奪われ，妻が就職して家計を助け夫が家政を預かるということになれば，夫婦の役割概念は変容し易く，もしそれが社会の規範や通念に添うていないと感じられるときは，自責や劣等感にさいなまれることになるのである。

役割概念と役割遂行とのあいだの矛盾が，即ち「役割葛藤 (role conflict)」と呼ばれるものであるが，それは個人の内面的 (intrapersonal) 領域の事柄であると同時に，一つの社会体系としての結婚の本質に従って，個人相互間 (interpersonal) の葛藤でもあって，夫婦の一方の所作が他方の期待を裏切るような，対人関係の場面を包含している。最も調和した夫婦に於てさえ，一方の役割期待が他方の役割遂行と完全に適合するということにはならない。例えば主婦が進歩主義的傾向強く平等論者である時，男子がある程度のフェミニストであるとすれば，たとえ両者の役割期待と遂行とは必ずしも完全に一致せず，一方が他方に多少の失望を感ずることはあったとしても，その優越を争うまでには至らない。しかし家父長的傾向の強い夫と平等主義者たる妻とが同居して，妻は自立性の立場を要求し，夫がそれに反対するとすれば，摩擦は必至のものとなろう。意思決定に発言権を拒否された妻は，必ずや抵抗的態度を示すに違いない。それが離婚にまで導くとしても不思議ではない。

役割葛藤の解消のための第一歩は，それらの葛藤をそのあるがままの姿において認識することから始まる。多くの場合，役割という考え方が夫婦のいづれにとっても意識されていないことから，葛藤克服の困難さがうまれてくる。ただ役割期待が既に幼少時から無意識的に獲保され，当事者たちに絶対的確信を与えているので，役割の喰い違いを生ずると，当事者は偏えに審判的態度をもって相手を批判しようとするので，妥協も譲歩も困難となってしもう。相手の喰い違った行動が，意識的に仕組まれた敵対的なものではなく，実はその両親の結婚から学んだ役割期待の無意識的な模倣的表明に過ぎないという理解をもつことは，役割葛藤の悩みを緩和する有力な手助けとなるであろう。

役割期待を成立させた過去の経歴的要因がまだ判然としない場合にも，役割問題を個人の欠陥とみるのではなく，双方の担う諸要因のダイナミックスのなかに生じた体系問題(system problems)と解することは，当事者たちからの自己防衛を受けることなしに，問題の解消に迫りうる一層容易なみちであると思われる。

役割葛藤解決のみちは，当事者の行動を変更させるか，または役割期待そのものを改めさせることにある。もしその妻が夫に，彼が最初期待していたより以上のことをして貰うことを期待していることがわかったとすれば，夫にとって最もよい解決方法は，妻の期待超過分に対応するために，自己の能力をより高度に発揮することである。このような譲歩を行うことは，満足な役割体系をつくりだす極めて有効な方法であって，そのための能力の出し惜しみの続く限り，夫婦間の焦操感は慢性的なものとなって存続する。結婚におけるかかる役割変更は，ただ個人の成熟にのみ期待すべきことではなく，当事者が相手を激励し支持することによっても実現する。例えば家事に不馴れな新

妻に対して，夫が夫婦の合意する新しい役割の習得のために妻を激励し支持するならば，妻は夫のその理解ある態度によって，役割行動に適合する機会をつかみとることができる。しかるに夫が逆に妻の失敗を酷評したとすれば，彼女は自信を喪失して，新しい努力の試みから手をひき，役割遂行上の一切の進歩から遠去かり，結局は役割葛藤を深刻化するに過ぎぬことになるであろう。

結婚の役割関係における適応と不適応との差は，自己の行動を相手の願望に適応させることを進んで行い得るか否かに依存している。自己の願望主張の欲求と相手の感情への配慮との絶えざる比較において，夫婦生活のバランス・シートを自覚し，両者が共に自己を殺す忍従によって安定を求めるのではなく，自己をこの愛情のバランスに適応せしめるために，快くそれぞれの行動を改めることができるようになると，そこに調和の道がひらけてくる。

役割葛藤は，相手の期待を充足するために，自己の行動のコースを変更することによってのみ克服されるのではない。相手が自己の役割概念やパースナリティ欲求を固執してやまず，変更を到底考慮し得ない場合でも，調和の道を保つためには「わが道をゆく」独立的態度を変更し，相手に対する期待を改めて，共同の意思決定よりも，相手の意思決定に依存する態度をとることによって，相互の役割期待の矛盾を解消し，結婚を均衡状態におくことも起り得る。この場合，夫婦の一方が自己放棄の感情ではなく，相手の立場を尊重することに積極的意義を感じ得るならば，それは抑圧の弊害を免がれることができるが，そのような強い適応能力は，「エゴ」の高度の成長をまってはじめて自然に到達しうるものなのである。それは「エゴ」を殺すこととは本質的に異ることを，正確に認識する必要があるであろう。

結婚当初においては，夫婦が結婚へと持ちこむ役割期待の不一致が，役割葛藤の主因をなし，その克服が主たる課題となる。しかし日を経るにつれて，子女の誕生と養育，新しい職業，或いは失業というような新しい環境からうまれる緊張が，役割葛藤の主たる源泉となってくる。役割概念は決して一定不変のものではなく，現実の生活事情の変遷に応じて，適当に変化し客観状勢に適合するものであるから，普通の生活弾力性をもつ夫婦であるならば，合理化過程を通して，その緊張緩和の方法を見いだすに違いない。共稼ぎを余儀なくされる夫婦であれば，いかに初めのうちは妻の就職を忌避する専制的な夫であっても，いつしか生活局面の現実性に対応する結婚役割行動を受け容れ，従前の権威的関係を乗りこえて，平等主義的態度に転換することになるであろう。

婦人の方が，役割行動や役割期待への適応力が強く，役割葛藤が発生するときは，進んで譲歩的態度をとるということは，一般に認められている。そもそも婦人にとって，結婚は彼女たちの人生の主たる役割遂行にかかわるという事実が，結婚の成功に一層大きな関心を抱かしめ，その成否を慎重に考えさせるようになるのである。女性の方が男子よりも結婚カウンセリングに熱意ある態度を示すといわれるのは，直面する危機の解消のために，彼女たちは，一般に真剣になるからである。

4　結婚期間と役割変化

役割適応の過程は，力学的均衡関係を主軸として展開される。ジョン・P・スピーゲルの論文『家庭内の役割葛藤の解決』[9]の述べるところに耳を傾けよう。

「役割の厳密な相互補完性によって形造られる高水準の均衡状態が，長期間にわたって保持されることは稀れであるということは，人間の条件の一部分をなしている。

遅かれはやかれ不調和が表面に現われてくる。相互補完性は崩れ去り，人間相互関係を特徴ずける役割体系は，不均衡状態の方向へ動いてゆく。役割を担う配偶者同志が，互いに相手の期待を失望させる。相互補完性の互解は，緊張・不安または敵意・自意識という形で，当事者たちの自覚へとハネ返ってくる。」

〔註9〕 John P. Spiegel, "The Resolution of Role Conflict within the Family," *Psychiatry*, 20: 1–16. 参照。

期くして，夫婦はその結婚生活を通して，再調

整過程をくり返すことになる。結婚とは要するに継続的な共同生活のなかで，絶えず変化しゆく内的および外的要求に対して行われる調整と再調整との力学的過程であって，家族の生活サイクルの進行のもとで，夫婦は相互補足的体系における常に新しい均衡状態を求めて行動を修正し続けるのである。役割期待と役割遂行とのあいだの不調整を越えて，役割行動の変更を可能ならしめるようなさまざまの努力が，多くの人々の「生活の知慧」によって工夫されてきたが，社会的相互作用 (social interaction) の研究の進むにつれて，社会科学の領域において，結婚における成功もしくは調整を確保するための技術が次第に発達しはじめた。その領域で先駆的活動を遂げたのは米国であって，いまはすでにその分野での古典に属するが，Lewis M. Terman, *Psychological Factors in marital Happiness*, 1938; E. W. Burgess and L. S. Cottrell, *Predicting Success or Failure in Marriage*, 1939; Harvey Lock, *Predicting Adjustment in Marriage*, 1951; E. W. Burgess and Paul Wallin, *Engagement and Marriage*, 1953; などの書物が続々発表された。科学的研究の主要目的は結婚役割や相互作用についての知識や情報が，かって推量や直観に依存することを避けて，結婚における成功諸要因についての経験的情報を提供しうるような広汎な調査を基礎として獲得されることによって，将来への客観的予測に到達することに向けられている。

統計分析によって，結婚葛藤における諸種の要因が追求せられてきたが，それら数多くの要因のなかでも，配偶者との相互作用における結婚役割の問題が，個人のパースナリティ欲求と並んで，最も重要な位置を占めることが次第に明らかにされるようになった。

米国における結婚役割の研究において，近年扱われている問題のうち特に注目されるのは，結婚期間の長さに対応する役割変化の問題と，姻戚関係による役割拘束の問題であろう。

結婚初期にあっては，主として両親を結婚モデルとして抱いた結婚前の役割期待と，結婚の実態との喰い違いに対して，その幻滅感に打ちかって結婚役割の再設定を急ぐことが，若夫婦の課題となるが，結婚におけるロマンティクな関係の魅力喪失の速さは，男女によって時期を異にしている。ピーター・C・ピネオの研究によれば，「男性は，女性よりも早期に魅力喪失に悩まされることは明白な事実である。このことは，妻の場合に，結婚初期より中年において殆んど不可避的に調整関係の喪失が生ずるのと，鋭い対照をなしている。」[10] それは男性の役割期待の方が一層現実性を欠くか，女性の方が結婚関係の現実への反応に鈍いということから生ずるのであろう。

〔註10〕 Peter C. Pineo, "Disenchantment in the Later Years of Marriage," *Marriage and Family Living*, Feb., 1961, p. 10.

ロマンティクな幻想の消滅するのと入れ替えに，夫婦の当面する日常生活の諸問題を，共通経験としてわかち合うことによって，結婚関係に新しい価値が培われ，それが多くの夫婦を結ぶ固い絆となる。しかるに結婚後にも，求愛期のロマンティクな性質が持続すべきものと考えている人もある。そのような見解は，ロマンティクな表現形式の多くは，相互関係に対して，何ら他にわかち合うべきものを持たぬ場合にのみ，意味をもつという事実を忘れているのである。結婚関係が安定・満足感をもたらすとすれば，ロマンティク時代の行動類型は，相互間の安定・満足感の最も少ない時期に物を云うのであるから，もはや不適切なものとなっていると知らなければならない。

独身から結婚への役割の急速な変化にくらべて，結婚後の幾年月に生ずる多種な変化は等閑視されがちであるが，特に45才以後の女性の結婚役割には，画期的な変化が生ずることを重視しなければならない。いままで献身的に心を砕いてきた子女の養育を終えて，母親としての役割遂行に没頭した婦人の役割喪失 (role loss) の感情は極めて深刻である。男性には職業上の常に新しい視野が開かれてくるが，家庭婦人には新しい役割へ移行する行動の場が限定されている。今さら夫の職業へ協力を望んでも，結婚初期とは違って，人間的能力は機能的に既に遙かに異質的なものとなってしまっている。そこへ47，8才ともなれば月経閉止期が始まり，オバ・ホルモンの減少と結びついて，生理的機能的変化が多面的に現われてく

る。この時期に，彼女の人生に新しい意義を与えるような，ボランティヤ活動かパートタイムの就職のような，何らかの社会的役割が授けられないならば，結婚役割には救いのない空間が口をひらくことになるであろう。[11)]

〔註11〕 Joan W. Moore, "Patterns of Women's Participation in Voluntary Associations," *American Journel of Sociology*, May, 1961, p. 598.

男性にとっても役割変化は，50才を境として，肉体的にまた職業的に切実な問題となってくる。肉体の衰えはいわゆる役割衝撃 (role shock) を避け難いものとし，停年の接近についての焦燥感と入れ混った老後のやるせなさが日毎に影を濃くする。そこで彼らは結婚役割の再編成への願望を抱き，結婚の本質を再吟味しようとする。老人を遇する社会制度の不備のために，保ちうべくして実現されない老人夫婦の結婚役割が，いかに多くの人々の老令期を不幸にしていることであろうか。やがて「消えてゆく」老人たちは結婚不調整の多くの問題を背負いながら，世間からは放任せられ，自らは諦観のなかに忍従するよりほかに生活の方法をもたないが，その人々の結婚役割の研究こそは，これからの老人福祉の重要課題であると云わなければならない。

5　姻戚関係と結婚役割

いま一つの問題，即ち姻戚関係が結婚役割に与える影響については，核家族を中心とし，かつまた人は移動激しく，両親と子供夫婦との相い会うことの比較的少ない米国のような社会で，尚もこのことが論ぜられるのには聊か奇異の感を覚えるが，現実の結婚では，それが結婚という社会体系の本質に基いて，夫婦が両親や親戚とのつながりを無視し得ない事情にあることを思えば，それは依然として重大な問題であることが理解されるであろう。まして日本のように漸く拡張家族から核家族への移行過程にある国では，この問題は一層切実であって，それを軽視しては，結婚役割の研究は殆んど成りたたないと云うべきであろう。

結婚によって，若者たちがその両親の支配や影響から必ずしも完全に離脱するのではなく，結婚後も両親との感情的或いは経済的結合はながく残存する。そこには特殊な問題発生の状況がうまれてくる。子供の結婚によって，両親の従来の役割が第二義的なものに化するという事実をそのまま受け容れることは，多くの両親にとって容易なことではない。あるケースでは，両親の役割喪失は，子供の結婚相手への嫉妬または憎悪に変る。両親というものは，子供の結婚相手をわが子と同じ価値あるものとは見ない傾向をもち，新しく迎えた結婚相手に極めて批判的態度をとる場合が多い。

例えば両親の保護に慣れてきた夫が，俄かにその習慣を止めることができないために，妻は自分の役割が夫の両親によって奪われたと感じ，夫やその両親との間に新しい役割関係に入り難く思うことは，私どもの日常多く見聞するところである。また結婚後，夫婦はそれぞれ己が両親と相手の両親とを比較することがあるが，例えば夫がなが年料理の腕を鍛えてきた母と妻とを比較する場合，料理の好みも母と妻では異るし，その道のベテランである母と妻とが比較されることは，若妻にとって結婚役割への大きな脅威と感ぜられるであろう。そこで両親から批判的な眼で見られるとしたら，緊張が高まるのは当然である。文化を異にする他の家族環境を背景に育てあげられた若妻であってみれば，夫には懐しい故郷の話ではあっても，その母と長々と語り続けられては「よそ者」扱いをされているというひがみをもったとしても不思議ではない。

ランディス夫妻の研究によれば，姻戚関係より生ずる葛藤のうちで，その50%までは義母とのあいだに生じ，次が義姉妹，その次が義父との間におこっているという。[12)]

〔註12〕 J. T. and M. G. Landis, *Building a Successful Marriage*, New York, 1953, p. 289.

わが国の場合には，義母による葛藤の比率は一層高いものと思われる。またランディス夫妻の報告によると，研究対象となった夫たちの42%までが，義母が摩擦の主因をなしていると訴えているという。義母は，娘の夫が，自分の期待するよう

な方法で娘を処遇してくれないという場合に，夫としての役割に批判的態度を示すが，息子の妻の場合に比べて接触する視野は遙かに狭いので，その批判の範囲もおのずから限られている。

しかし母親の己が娘に対する統制力は，息子に対するよりは強いのが普通であるから，娘への干渉はその結婚後も容易に断念することができない。それが娘の夫に対して，義母はその権限を逸脱し，彼の夫としての役割権限をも蹂躙しつつあるという抵抗感を与えるのである。

義父と義娘との関係では，ランディス夫妻によると，若妻の僅かに11%がそこに問題の生じたことを訴えているにすぎない。父親は家事や育児に携わることが少ないので，役割の競合関係は少ないし，義父が若妻をその夫に惹きつけたのと同じ特徴を多く身につけていることは，若妻にとって，むしろ役割関係上の親近感を抱かしめられることにもなるであろう。

以上に述べたところは，結婚役割の展開される諸背景にかかわっているが，夫婦関係をめぐる役割構造の社会学的認識の進むにつれて，幸福な結婚への道は一段と稔り多きものとなるであろう。